

平成 28 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	28K06	氏名	高橋 浩一
研究主題 —副主題—	小学校高学年の英語科導入における教員研修の一考察 —教員のクラスルームイングリッシュ不安解消—		
派遣先	玉川大学教職大学院	担当教官	佐藤 久美子
所属校	練馬区立大泉学園緑小学校	校長	田頭 裕

キーワード：研修、コミュニケーション、モジュール、クラスルームイングリッシュ

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

本研究の目的は、英語教科化に向けて文部科学省が進めようとしている英語授業の要点、また、英語教科化に伴う小学校教員の意識や現状における課題を明らかにし、課題を解決する一具体策として小学校教員研修の在り方を提案することにある。

文部科学省(2015)中央教育審議会・教育課程部会・外国語ワーキンググループは小学校高学年の英語教科化において、次のように示している。

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、コミュニケーションの目的を理解し、見通しを持って目的を実現するための言語活動を通して、聞いたり話したりするとともに、読んだり書いたりすることに慣れ親しませ、コミュニケーション能力の基礎となる資質・能力を育成することを目指す。」

英語教科化に向けてコミュニケーションの重要性と、コミュニケーションを支えるための四技能(話す・聞く・書く・読む)を統合的に指導することの重要性が示されている。また英語授業時数の増加に対応するためモジュールで授業を行うことも示されている。その際にはALTが全ての英語授業につかないことも想定される。

しかし、小学校教員はコミュニケーション活動のイメージがつかめず、コミュニケーションを促すクラスルームイングリッシュに不安があるため、ALTに授業を任せてしまう現状にある。さらには今後、四技能(「話す」・「聞く」・「読む」・「書く」)を統合的に指導する意図を都合よく解釈し、「読む」・「書く」を中心としたコミュニケーション重視ではない授業を展開するおそれがある。

以上述べたことから小学校教員が抱えるクラスルームイングリッシュの不安を解消し、モジュールに対応したコミュニケーション重視の四技能(「話す」・「聞く」・「読む」・「書く」)を統合的に指導する英語授業を展開させる研修を構築することは必要不可欠であると考えた。

2 研究の内容・研究の方法

① 文献研究

文部科学省が示した施策を背景に小学校英語の授業、クラスルームイングリッシュ、研修に関する先行文献を分析することで小学校英語教育における課題を把握する。

② 小学校英語教育に関する教員の現状や課題を把握するための質問紙調査

自校の行政区である練馬区の小学校教員に対して、外国語活動(学習指導要領改訂に関わる英語授業も含めている)の授業における課題や望まれる研修についてのアンケートを行い分析する。

*練馬区10校、191名の教員を対象に調査を実施

③ 先進研究校の取組に関する調査(学校訪問)

＜訪問校＞・東京都内A小学校

国際教育推進パイロット校の先進的な取組における小学校英語授業について調査する。中でも教員のクラスルームイングリッシュに着目し、クラスルームイングリッシュの数と種類を分析することで、文献研究によって捉えられた小学校教師の英語力における課題を再確認する。そして課題の解決を図る方法を探る。

④ 英語研修の構築

文献研究・質問紙調査・先進研究校の調査をもとに、これからの小学校英語教育に求められ、かつ課題を解決するための研修を構築する。

⑤ 検証授業

＜検証授業校＞・東京都内B小学校

研修の前後で授業を行う。教員のクラスルームイングリッシュにおける発話回数・内容・意識の変化、また児童の発話回数・内容の変化をビデオ録画や教員へのインタビューで分析する。本研究で構築した研修が課題の解決に有効であるか検証する。

3 研究の結果

文献研究

クラスルームイングリッシュを23項目4領域から成る枠組みで分析していた研究を基礎研究とした。文献研究では、クラスルームイングリッシュの中で、教員にとって必要と認めるところであるが技能的・現実的に十分な使用ができないと思っている項目や領域が存在することが分かった。例えばWhat is this? など「教材(絵本、絵カード等)に直接的、明示的に示されている内容を児童に確認させる発問をする」項目であり、教員と児童の関係作りに関する領域である。児童に発問するクラスルームイングリッシュは、児童のコミュニケーション力を育成する授業を行う上で重要であり、教員研修を行うときには必ず取り上げ練習すべきクラスルームイングリッシュであることが分かった。

小学校英語教育に関する教員の現状や課題を把握するための質問紙調査

練馬区内10校の小学校教員に対して質問紙による調査を行った結果、「基本的な英語を使って児童の前で話す活動を行うことができる」の項目に対して「あまりそう思わない」と「思わない」を合わせた回答は64%にも上る。小学校教員は英語を使っての発問や指示、そして児童相互にコミュニケーションさせるクラスルームイングリッシュに対して苦手意識をもっていることが分かった。また練馬区内10校の小学校教員が不安に感じているクラスルームイングリッシュの項目や領域は文献研究で得られた結果と重なることも分かった。

先進研究校の取組に関する調査

先進研究校の小学校第6学年英語授業において、クラスルームイングリッシュを分析したところ「授業運営上の指示や命令」の項目が一番多く使われ、61.2%を占めていた。「授業運営上の指示や命令」の項目は文献研究において、教員が必要と認めるところであるが、技能的・現実的に十分な使用ができないと感じている項目である。先進研究校の教員は「授業運営上の指示や命令」におけるクラスルームイングリッシュをセンテンスが短い比較的簡単なクラスルームイングリッシュとして使っていた。また、絵本の読み聞かせをパターン化し、教員が登場人物の名前を話すだけで、児童がその人物のセリフを考えて話す活動を行っていた。つまり比較的簡単なクラスルームイングリッシュを使うことで児童にコミュニケーションを促していたことが分かった。

研修の構築

文献研究や先行調査から、絵本の読み聞かせを取り入れ、コミュニケーションを促すための比較的簡単なクラスルームイングリッシュを使用する研修の構築が必要であることが分かった。研修を実践した結果、意欲的に取り組み、コミュニケーションを楽しむ研修者の姿が見受けられた。

検証授業 研修に参加した第5学年教諭3名

研修によって、英語にある程度自信があり、英語授業経験が豊富な教諭Aは、授業において日本語の発話、英語の発話を減らし、相対的に見てコミュニケーションに関連するクラスルームイングリッシュを多く使用するようになった。

英語にある程度自信があり、英語授業経験が少ない教諭Bは、授業において英単語だけを繰り返し発話することを減らし、相対的に見てコミュニケーションに関連するクラスルームイングリッシュを多量に渡り多く使用するようになった。

英語に自信がなく英語授業未経験の教諭Cは、相対的に見てコミュニケーションに関連するクラスルームイングリッシュを多く使用するようになった。しかし日本語の発話も増やした。

尚A、B、C教諭3名それぞれの授業において、教師がコミュニケーションに関連する英語を増やすことで、児童もまたコミュニケーションに関連する英語発話を増やしていたことが分かった。

4 研究の考察

本研究において実践した研修は、小学校教員のコミュニケーションに関連するクラスルームイングリッシュの重点的使用につながった。また児童のコミュニケーションに関連する英語発話の向上にもつながった。そしてクラスルームイングリッシュや児童の英語発話における変容を小学校教員が認識した結果、クラスルームイングリッシュの不安は減少した。つまり本研究において実践した英語研修は、小学校教員のクラスルームイングリッシュの不安解消に十分な役割を果たしたと言える。

5 今後の展望

モジュール授業に対応し、絵本やDVDを活用した研修並びに授業実践を提案する。コミュニケーションに関連するクラスルームイングリッシュの使用を推進する時間や場となり、小学校教員のクラスルームイングリッシュ不安解消につながると考える。

